



Title	新宗教の信仰者による災害ボランティア活動の持続要因：金光教大阪災害救援隊を対象として
Author(s)	陳, 重道
Citation	共生学ジャーナル. 2022, 6, p. 152-178
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86430
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

新宗教の信仰者による災害ボランティア活動の持続要因

—金光教大阪災害救援隊を対象として—

陳 重道*

Factors why the believers of the New religious movement kept up disaster-relief volunteer work

A case study of a volunteer team of Konkokyo

CHEN Zhongdao

論文要旨

本稿の目的は、新宗教の信仰者が長期間の災害ボランティア活動を続けてきた持続要因を活動に参加する個人と活動を展開してきた組織両方の視点から明らかにすることにある。そのため研究対象である金光教大阪災害救援隊に対する参与観察に基づき、半構造化インタビューの手法を用いて主要メンバーを調査し、その回答を分析した。その結果、個人の持続要因では、従来の研究で明かされた信仰、キーパーソンの存在などの要因の他に、持続的な活動の中で築かれた隊内外の信頼関係も要因の一つだと示すことができた。組織の方では、教団本部との距離間による独立性が隊の活動が持続できる要因の一つだと明らかにしたが、それは同時に隊組織の存続に問題をもたらししていることも示唆した。

キーワード 災害ボランティア、持続要因、共感性、信頼関係

Abstract

This study aims to investigate the factors why long-term disaster-relief volunteer work has been kept up by the believers of the New religious movement from the perspectives of both the personal and the group level. For achieving the purpose, the researcher conducted interviews on the main members of a volunteer team of Konkokyo. Besides the religious faith and the effect of role models, the research reflected that the mutual trust that has been constructed inside and outside the team during the long-term disaster-relief volunteer work was an important factor for individuals to keep up. Also, the research indicated that a sense of the distance between the team and the headquarters of Konkokyo was another factor allowing the team to continue their volunteer work.

Keywords: disaster volunteer, lasting factors, empathy, the mutual trust

* 大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程；chenzhongdao0118@yahoo.co.jp

1. はじめに

社会を構成する重要な一部として宗教は社会学の分野で重視されており、宗教が社会における役割に関する議論は社会学という学問が確立されるころから展開されていた。日本では、1995 年の阪神・淡路大震災をきっかけにボランティア活動と組織が発達し、それらに対する関心も上がり続けてきた。その中、やや遅れたがボランティア活動に参加する団体の一種類として宗教を基盤とする組織の存在が確認され（稲場・桜井 2009）、この過程こそ「宗教と社会貢献」というテーマを用いた研究の日本における発足だった⁽¹⁾。これを機に「新たな公共」の担い手という視点で展開される宗教に対する検討も盛んに行われるようになった。

欧米では、宗教と社会貢献に関連する研究はより早い時期に展開され⁽²⁾、ボランティア活動の参加に対して宗教は「特に強力な予測変数」であり、信仰の深さと教会活動の頻繁性が重要であることが指摘された（パットナム 2006, ウィルソンら 1995）。日本でも、「宗教施設参加頻度」において「定期的参加層」は「非参加層」と「行事参加層」よりもボランタリー組織に所属する傾向が高く、「非参加層」よりボランティア活動を行う傾向が高いことが明らかにされた（寺澤 2012:67）。さらに、稲場（2009:40）は「宗教の社会貢献」を「宗教者、宗教団体、あるいは宗教と関連する文化や思想などが、社会の様々な領域における問題の解決に寄与したり、人びとの生活の質の維持・向上に寄与したりすること」と定義し、その構成要素と領域を示した。また、宗教者が社会貢献する傾向を検討する際によく関連して提起される概念として「利他主義（altruism）」がある。近代で利他主義に研究の焦点を合わせた一人としてソローキンがよく議論される。ソローキン（1977）は、人が利他的になる要因に焦点を合わせて、アメリカにおける良き隣人とカトリックの聖者たちが示す利他性に関して研究を行い、「善き隣人」の人物像を提示した。利他主義の研究は日本でも多くなされており、その中で稲場（2011:44）が利他主義を「社会通念に照らして、困っている状況にあると判断される他者を援助する行動で、自分の利益を主な目的としない行動」と行動論的に定義した。

一方、宗教者のボランティアが、継続的に災害救援に参加する原因を探求

するための研究も多くなされ、筆者はこれら研究の結論を主に信仰とのつながり、活動を率先して展開する個人の重要性和宗教内部によるバックアップの三つに分類している。中でも最も理解しやすいのは信仰とのつながりだろう。宗教者、または新宗教の信仰者は災害ボランティア活動の中から彼ら自身の信奉した神の教えに同一性を見出し、信仰の実践の一つの形式として災害ボランティア活動を認識することに至るのがこの要因のポイントである。事例として、渡辺 (2011:27) が天理教による社会活動の意義とあり方に対し分析を行う際に同教の教えである「ひのきしん」の思想を欠かせない一部として取り上げた研究がある。渡辺は「ひのきしん」が漢字に当てると「日の寄進」となることから、それが日々の生活で実践できる行為であると論じながら、「…これが、天理教および天理教信仰者が社会的活動を行う際のきっかけや意欲、主体性を内発させる根拠となっている。」と述べた。

活動におけるキーパーソンの存在も重要である。彼らは実際に現場で働きながら被災地と教団組織を連結させ、現場にいる参加者を導くことができるからだ。高橋 (2014) によれば、立正佼成会が難民を支援する際には、難民側にとっての定住化における「重要な他者」の役割を担当している支援者の一人は、同時に支援する側である教団組織と政府をはじめとする難民支援に関わる他組織との連携を主に担当していた。その彼の長期的な関与があったからこそ教団による難民支援活動が上手く続けられたとされる。新宗教に由来する組織ではないが、世界規模でボランティア活動を展開している曹洞宗関連の NGO シャンティ国際ボランティア会 (SVA) が成長する過程の中でも、一僧侶である有馬実成による後押しは欠かせなかった (大菅 2006)。

また、新宗教の信者が災害ボランティア活動を展開するにあたって、教団によるバックアップも彼らにとっては必要である。上述のインドシナで難民支援の事業を展開してきた立正佼成会を対象に展開した研究において、高橋 (2014) は活動の発展と持続化とそれとほぼ同時期で行われていた教団の変革に関連性を見出した。これは活動の展開時期によって恩恵を受けた一例だが、地の利の一面から教団に強く押されて成長できたボランティア活動もある。2011 年に発災した東日本大震災の後で展開された新宗教による災害ボランティア活動を対象とする検討の中では、よその地域から駆け付けて救援活動を展開する新宗教の信仰者が現地にもともと存在し、被災

者と同じ境遇にあった信仰者たちによってサポートされていた事実が指摘された（藤井 2019, 寺田 2019）。

また、宗教者に限らずボランティア活動の参加者全般の視点から、ボランティア活動の参加動機もこれまで多くの研究で検討されてきた。その中で代表的な分類の一つとして Clary ら（1998）が提出した VFI モデルがあり⁽³⁾、さらに、範囲を災害ボランティア活動に限定すると、高木・玉木（1996）は阪神・淡路大震災後のボランティア活動参加の動機を検討した⁽⁴⁾。

このように、宗教の社会貢献に関連する諸要素と宗教関連の災害ボランティア組織が持続する要因は先行研究によって多く提示された。しかしこれらの要因の多くは宗教、またはその宗教と関連するボランティア団体内部で終わるものであり、災害現場で実際に活動し、被災者との相互行為により支援側としての宗教信仰者の中で新たに発見される要因に対する議論はまだ不十分だと筆者は考えている。したがって、本研究では金光教大阪災害救援隊という宗教関連の一災害ボランティア団体に注目し、彼らが災害ボランティア活動を持続的に行えたことにどのような要因が存在するのかを考察することで先行研究の補足を目指したい。

2. 研究対象と方法

2.1 金光教大阪災害救援隊

本研究で筆者が取り上げる金光教大阪災害救援隊（以下：救援隊）は金光教由来の組織で、金光教大阪センターに直属する災害ボランティア組織である。

金光教は教派神道連合会に属する日本の新宗教の一つで、幕末に創立された創唱宗教である。金光教はその創立の時期により、同じ江戸時代末期に開かれた黒住教、天理教と共に幕末三大新宗教と呼ばれることもある。社会貢献活動の視点から見る際に、金光教独自の教え「あいよかけよ」という言葉は非常に重要である。金光教において、「あいよかけよ」とは立教神伝での「氏子あつての神、神あつての氏子、あいよかけよで立ち行く」という言葉を縮めた表現であり⁽⁵⁾、その意味は「神と人とのあるべき関わりを示した言葉で、人は神の願いを受け、真実な生き方を求めて立ち行くことになり、

神もまた、人の真実な生き方によって、その働きを人の世に現すことができ、神も助かるということ」となっている。すなわち、金光教はその根本から神と信仰者との助け合い関係の実現を目指しているといえよう。そして、これを信者の社会貢献活動に結びつけたのは金光教の死生観である。その死生観によれば、金光教が信奉する「天地金乃神」は天地の根源の神で、根源的に他宗教の神とは同一神であるとされている。そのため、金光教の信仰者は相手の信仰の有無や正否を問わず天地に生きる人間をすべて神の氏子である認識を持つことが可能になり、この認識によって信仰の有無を気にかけることなく様々な現場で素早く動けることが考えられる。

・救援隊活動の姿勢

救援隊は 2011 年の東日本大震災被災地をきっかけに災害ボランティア活動に関わってきた。2020 年 12 月の時点において、救援隊は既に東日本大震災に対して 35 回、熊本地震に対して 26 回、九州豪雨災害に対して 11 回、西日本豪雨災害に対して 24 回、台風 19 号被災地に対して 4 回のボランティア活動を行ってきた。また、主な活動内容から見れば、救援隊は炊き出しを中心に様々な被災地で災害ボランティア活動を展開し、その場にいた被災者たちに温かい食べ物と共に安心感を届けてきた。そのために、救援隊では炊き出しの器材と食材を車に乗せて被災地まで走るのが基本となっている。また、炊き出しと関連する形で、救援隊は被災地における祭りへの参与、カフェの設営といった被災者の日常生活に深くかかわる事業にも参与してきた。宗教色を極力出さない救援隊であるが、被災者の要望に答えるために宗教者にしかできないこととして御霊祭を行うこともあった。

2020 年の時点で救援隊の主力メンバーは大阪に身を置く隊長 s 氏と参謀 a 氏を除くと 4 名で、それぞれ別の府県に住んでいる。また、これら以外にも大阪でのバックアップ役 1 名と大学生 2 名が多く活動に関わっている。

次に、本稿の調査背景として、筆者が金光教大阪災害救援隊を参与観察した際に主にかかわっていた二つの被支援事例を紹介する。

一つ目は岡山県倉敷市真備町にある市場仮設団地である。その仮設団地は 2018 年に起こった西日本豪雨災害で被災し家屋を失った被災者たちのために建設されたものである。また、戸数が 53 で人数が多い市場仮設団地だが、建設された場所は山奥にある工場の傍で、交通アクセスも決して便利で

はなかった。これらが原因でこの仮設団地では他の仮設団地と比べてボランティア活動がそこまで盛んでいなく、救援隊メンバーが言う「支援の手が行き届いていない場所」であった。

二つ目の事例は熊本県益城町にある安永仮設団地である。この団地は2016年に起こった熊本地震後に被災者のために建てられたもので、70戸の被災者が住んできた場所だった。災害が起きてからの3年間で復興するにつれ、段々と仮設団地から引っ越されていく者もいたが、それでも2019年に筆者が参与観察を行った際にはまだ半数近くの住民がこの仮設団地に住んでいた。

・研究対象となる理由

金光教大阪災害救援隊を本研究の対象として選んだ理由は主に次にあげる二つだ。

一つ目の理由は宗教ボランティアの発展において、金光教は諸宗教の中では後発であり⁽⁶⁾、成熟した宗教を基盤とするボランティア活動よりも変化のプロセスを観察しやすいこと。

二つ目の理由として、金光教大阪災害救援隊と金光教教会本部との関係である。先述で紹介したように立場上では金光教の本部ではなく、その傘下にある大阪センターに直属している「各種団体」に位置付けている⁽⁷⁾。こうした本部から「やや遠い関係性」によって生じるメリットとデメリットを観察することにより、救援隊における独自の傾向が観察できる。

2.2 研究方法

本研究において、筆者が主に扱う研究方法は参与観察とインタビュー調査の二つである。

参与観察において、筆者は2018年10月の金光教大阪災害救援隊による真備町市場仮設団地に対する支援活動（カフェ）を機に救援隊のメンバーと接触し、同年11月に初めて救援隊の炊き出し活動に関与することになった。それから、筆者は2019年3月の市場団地炊き出し、4月の熊本安永団地炊き出しなど、救援隊の一員となって隊のボランティア活動に計9回参加し、回ごとの現場での観察結果をノートにまとめてきた。

続いて、インタビュー調査の部分だが、本研究において筆者が採用したイ

インタビュー方法は半構造化インタビューである。具体的に言えば、筆者は2019年8月より救援隊のメンバーとして活動している6名にインタビュー調査を行った。6名はそれぞれ金光教徒である救援隊の幹部1名、メンバー3名、隊の活動によく参加している金光教への信仰を持たない大学生と被災地当地の有志各1名である。

表1 インタビュー調査対象者

	年齢	性別	身分	開始時期	主な役割	所属	インタビュー日付
a氏	40代	男性	救援隊参謀	2011年 東日本大震災	活動計画に関与 現場の担当者 運転士	金光教大阪センター／大阪鶴橋教会	2019年 10月、 2020年 11月
b氏	30代	女性	救援隊メンバー	2016年 熊本地震	資材整理 現場での采配 運転士	愛媛の金光教教会	2019年 10月
c氏	40代	男性	救援隊メンバー	2016年 熊本地震	実働スタッフ 運転士	今治の金光教教会	2019年 12月
d氏	50代	男性	救援隊メンバー	2011年 東日本大震災	実働スタッフ 物資の準備	大阪の金光教教会	2020年 12月
e氏	20代	女性	被災地のボランティア	2016年 熊本地震	実働スタッフ 現場での采配	派遣社員	2020年 12月
f氏	20代	女性	学生ボランティア	2018年西 日本豪雨 災害	料理サポート 資材整理	o大学	2019年 11月

筆者は以上の6名に対し、以下の問題を中心にインタビューを行い、インタビューの語りから本研究に関連性のある話を拾い上げて分析をした。

- 1、救援隊の災害ボランティア活動に参加し始めた経緯とその時の体験談
- 2、救援隊の活動中に最も印象に残った経験

- 3、救援隊の活動中に金光教の教えに触れた経験
- 4、これからの救援隊の活動展開において気になっていること
- 5、救援隊のリーダー格である a 氏に対する想い

6 名に対するインタビュー時間は基本的に 1 時間ほどだが、a 氏に対するインタビューだけが二回行われ、総計時間約 3 時間のものとなった⁽⁸⁾。

3. 被災地へ赴く理由

筆者は被災地で活躍する新宗教の信仰者が救援活動を持続させた要因を分析する際に、調査結果から読み取れる情報をそれぞれボランティア個人と組織に関連するものに分類し、さらに個人要素を内的要素と相互関係による外的要素の二つに分類した。この章ではまず個人における内的要素を考察する。そもそも彼ら彼女らはなぜ救援活動に参加したのだろうか。その答えとなる彼ら彼女らを災害現場へ向かわせた最初の理由こそ、後に活動を持続的に行うようになった原因と大きく関わってくると筆者は考えている。

3.1 被災者と共感する力

災害ボランティア活動に参加する理由は人それぞれである。Gerard (1985) と Penner ら (1998) は四つのモデルを挙げ、ボランティア活動に従事する者は複数の要因を持つことを指摘した。その四つのモデルは (1) 社会奉仕活動が属するグループの強いアイデンティティである場合、(2) 社会奉仕活動が個人の価値観と態度に強く同調する場合、(3) 自らの技能学習や自己充実のための社会奉仕活動である場合、(4) 純粋に人を助けたいと強く感じる場合だ。

筆者がインタビューの最初の質問「①救援隊の災害ボランティア活動に参加し始めた経緯とその時の体験談」に対しての 6 名の救援隊メンバーの回答から確かに上述した要因が含まれていると分かった。その中で最も強く前面に出ているのが (4) 純粋に人を助けたいという彼ら彼女らのパーソナリティを象徴する部分だった。ここでは代表的な一例として a 氏の語りを紹介したい。

未曾有の災害が起こった時に自分は人としてどうあるべきかを考えた。そこで一晩中眠れずにずっとテレビの映像を見ていて朝方になるとやはり行きたくてしょうがなかった。…その時の大阪センター所長のところに行って『所長すいませんけども、私東北へ行きたいと思いますのでしばらくお暇を頂戴したいと思います』って辞表を胸に入れていった。(a氏のインタビューより)

そのときに、ある大きな避難所で大きなトレーラーの上に六つも大きい寸胴を並べて、そこで豚汁をみんなにふるまっている光景に目が留まった。…それ見て、豚汁一杯で涙を流すというのが、どういうこと何だろと思ったんや…それをみたときに自分はそっち側の立場の人間にならねばと決めた。(a氏のインタビューより)

a氏が語ったこの二つの経験が起こった時間、場所こそ違ったが、中には「見る」という行為が共通しており、それがa氏のその後にとった「辞表を提出しても被災現場へ向かう」と正しく支援できる側になる行動につながったのだろう。おそらくa氏はこの「見る」という行為を経由して、被災者たちが実際にどのような状況に置かれていて、それがどれだけ辛いことだったのかを自身の中で模擬体験したのだろう。この過程こそが、a氏が被災者に共感する過程であり、それを可能にしたのはa氏が持つ共感的な性格、または利他的な価値観だ。

似たような共感経験は他のインタビュー対象者の回答からも見られる。c氏は韓国にいるにもかかわらず地震に関する報道を見て「帰国して何かさせてもらいたい」と思うようになり、d氏は新潟水害が発生した際にa氏と同じくテレビを見て「もういたたまれなく」になり、b氏とf氏は初めての被災地での活動する際に目にした光景のショックを受けた。テレビ経由で見るのと実際に現地で目にするなど、方法こそそれぞれによって差があるとはいえ、メンバーたちは確かに被災地の惨状を見ることによって、被災者たちが置かれている大変な状況に気づくようになった。したがって、被災者に対して共感し、その共感によって救援隊を中心とする災害ボランティア活動に身を投じるようになったといえよう。

以上のように、救援隊メンバーが救援隊の災害ボランティア活動に参加した共通理由として、利他的な価値観と共感的な性格に基づく援助責任の受容という要素の存在が確認された。これらの要素によってインタビュー対象者全員が見せた人を助けたい意志が彼ら彼女らを現在の救援隊という災害ボランティアの団体に繋ぎとめた最も重要な要因だと筆者は考えている。

3.2 教義の実践として

既述のように、宗教関連の組織、または個人によるボランティア活動を検討する際に、一番よく取り上げられるのは信仰との関係である。宗教者が被災者に寄り添い、被災者のために物質的ないし精神的な援助を提供する災害ボランティア活動もまた自らの信仰に従って行われた行為の一つである。

本研究のインタビュー調査に組み込まれた「③救援隊の活動中に金光教の教えに触れた経験」という質問に対する a 氏、b 氏、c 氏、d 氏 4 名の回答からも、表現の仕方、発現するタイミングや意識程度の強弱にこそ個人差があるものの、4 名が救援隊の災害ボランティア活動に参加し、それを継続してきた理由の中には確かに金光教の教えによる精神上、理論上のバックアップが見られた。この中で教えを最もはっきりと口にしたのが c 氏だ。

天地金乃神様、教祖が「人が助かりさえすればいい」と、とにかく難儀で苦しむ人たちを助けたいというのが金光様の信心だと思うので、そこで私自身も行きたい、教祖様の思いに少しでも近づき、人のお役に立ちたいと思っていましたから。特に地震や津波、水害で被災して…一番苦しんでいる人たちに寄り添いたい。それが金光大神の信心だと思います。(c 氏のインタビューより)

c 氏は東日本大震災をきっかけに災害ボランティア活動に従事するようになり、それ以降どうすれば被災者の心に寄り添うことができるのかという課題を中心に何度か試行錯誤し、最終的にたどり着いたのが救援隊での炊き出しボランティアだった。c 氏は教祖の「人が助かりさえすればそれでいい」の教えに基づき、自らも「教祖の思いに少しでも近づき」たいと考え、そのために取るべき行動が「被災して…一番苦しんでいる人たち」に寄り添

うことだと決断した。

金光教の教えに直接に触れることはなかったが、a氏は救援隊の災害ボランティア活動がこれまでに大きなトラブルがなく続けられてきたことに、金光教の神様による支えは欠かせなかったと考えている。その際にa氏は「神様が自分たちの後ろに控えてくださって」、「神様にお任せする」ことだと述べていた。

他の3名と違い、d氏は自身が災害ボランティア活動に従事したことを一種の教義の実践だとは思わなかった。

いやいや、もうそんなに、教義はそれは人をたすけないといかんだとか金光教の教えがあるけど、その教えを実践するためにしているわけではない。でも体が動くね、かわいそうやなって思って、行ってあげようと思う。それだけで理屈がないね。(d氏のインタビューより)

d氏の回答の中心はおそらく人を助けるのに「理屈がない」ということだろう。d氏は人を助ける金光教の教えを指摘したが、自身が動くことより先にそれについて考える必要はなかったと思っているようだ。しかし、これについて筆者が「体が動くのは、これまで金光教の思想に触れてきた中ですでに人を助けるなどが身に染みたのも原因の一つ」ではないかと聞くと、d氏はこれを肯定し、さらに人の「質」が重要だと述べた。

3.3 内面化する宗教性

宗教者によるボランティア活動はよく布教や勧誘活動として疑いをかけられる。この現象については1995年の地下鉄サリン事件による悪影響とカルト教団の強引な勧誘活動が強く関与しているのだろう。そのために、多くの宗教団体と関連のある災害ボランティア団体は自らの活動に宗教的な一面を出さないよう努力を求められている。金光教大阪災害救援隊は金光教の組織であり、同じ課題を課せられている。実際に、筆者が救援隊の災害ボランティア活動数回参加してきた中で、たとえ相手が岡山県における金光教の本部に近い真備町の仮設団地の住民で、金光教に関する基礎的な認識を備えている被災者だとしても、隊員らは決して率先して金光教の教えを

口にすることはなかった。災害ボランティア活動における救援隊隊員たちのこの姿勢だが、筆者の考察によれば、世論に従って宗教性を出さない一面もあれば、そもそもそれを出す必要はない一面もあった。なぜなら、その宗教性はすでに彼ら彼女らの内面に収まっており、災害ボランティア活動に従事している彼ら彼女らの一つ一つの意思決定、一つ一つの動きによって十分に表れていたからである。

前節でd氏が述べた「体が勝手に動く」のが一例である。d氏にとって人助けする、または災害ボランティア活動に身を投じる選択は、ある意味で無意識のうちにできたことであり、そこには教えの干渉などなかった。しかし、筆者から見れば、そこは教えが干渉していないのではなく、そもそも教えの干渉がすでにもっと根幹的な所に及んでいたのだ。d氏は長年金光教の教えに触れ、「人が助かりさえすればそれでいい」という金光教の中心的思想を取り込み、自身の一部として見るようになったのだろう。実際にb氏は救援隊のボランティア活動に参加する選択と金光教の教えとの関係について「やはり小さいころから教会で誰かに教われて」と述べていた。

以上のように、自身の宗教性を前面に出さず、もしくは意識せずに金光教信徒である救援隊メンバーがとった行動は、一見他のNPO、NGO団体のボランティアたちの行動と大差はないが、その裏、いわば行動した信徒たち本人の中では、これらの行動は自らの信仰に従ったもの、または関連のあるものとなる場合が決して少なくない。また、このような行動様式では、よその人、特に被災者からは宗教性が見えにくい、信徒本人の中では確実に教義を実践し、信仰する神様に近づくための効果であるのだ。彼ら彼女らのこのような自身の信仰を顕在化させない、または意識しない行動様式は宗教性を内面化した行動だと考えられ、このような行動様式もまた彼ら彼女らを災害ボランティア活動の現場に持続的に通わせる一つの要因だと考えられる。

4. 継続的な活動参加

ボランティアの継続的な活動参加が実現する要因には、その人が活動に参加する理由に由来する要因もあれば、活動参加によって得た様々な体験

から新たに発生する要因も数多く存在する。すなわち前述した相互関係による外的要素である。筆者は特に活動中における救援隊メンバー同士やメンバーと被災者との間の強い信頼関係に注目した。

4.1 「ボランティア」と「被災者」を超える関係づくり

・信頼関係とその形成

安永仮設団地で活動する間、仮設団地の住民たちは救援隊メンバーに対してとても親切であった。住民たちは調理場のテント張りなど事前の準備を手伝ってきたり、炊き出し以外の時間にも救援隊の活動場所である集会所に談笑しにきたり、仮設団地外に引っ越したのにもかかわらず、仮設団地に立ち寄って弁当をもらったりした。特筆すべきなのは、炊き出し活動は3日間続くが、その間に救援隊は仮設団地の集会所に泊まっていた。長きにわたって活動を続けてきた内に被災者が自ら集会所を宿泊地として提供するようになったからだ。救援隊は、炊き出しボランティア活動をしに来たはずだが、仮設団地の住民たちの様々な反応を見れば、これはむしろ遠方で住む親戚か友人が戻ってきたような雰囲気、筆者は両者の間には「被災者」と「ボランティア」を超えた信頼関係を感じた。

では、こうした信頼関係はどのように築き上げたのか。単純な因果関係から見れば、これは救援隊の継続的な支援が導いた結果の一つだと考えられる。よって、最初に検討すべきなのは「なぜ救援隊は『継続的な活動』という姿勢を、彼らの災害ボランティア活動に取り込むと決めたのか」という問題だ。今の救援隊の継続的な活動姿勢を決めた一人である a 氏は以下のように述べていた。

被災した人は…本当の心というのは一回、二回では絶対見えない。…やっぱりちゃんと自分が家を建てて仮設（団地）から出ていて普通の生活に戻りましたってなるまでその人たちに安心ってないと思う。

一回、二回で支援活動を終わる人たちに「実は私本当はこういうことで困っているんです」って言わへんや。やっぱり仲良くなっていてからそれが聞けてくるのだと思う。それでこそ寄り添いだと思うから。（a 氏のインタビューより）

この話に見られるように、a 氏の中では、被災者たちにとって仮設団地へ入居できて、何とか生きていけるようになったところで、彼ら彼女らに対して震災がもたらした損害や損傷は簡単に消せるようなものではない。被災者たちの「本当の心」や「本当に困っていること」を知るためには、やはり長きにわたって支援活動を継続的に行い、被災者と対面する回数を重ねていく必要があると a 氏は考えている。おそらく a 氏が持つ「被災者の心に寄り添い、まだ発見されずにいるニーズに答える」という信念の裏には、いかにして自分たち宗教者が持つ被災者の精神面をケアする機能を発揮できるのかという思考が含まれているのではないのだろうか。

・信頼関係がもたらす効果

継続的な活動姿勢によって育てられた被災者と救援隊の強い信頼関係にはどのような効果があるのだろうか。筆者の観察によれば、少なくとも三つの効果がある。この三つの効果はそれぞれ(1)救援隊メンバーの次の活動参加を促す効果、(2)被災者の相互関係の調節における橋渡し効果、(3)現場の被災者を活動の協力者として吸収する効果である。それではまず、救援隊メンバーたち自身を対象とした(1)の効果について触れていきたい。

被災者の方々といってもはじめは漠然としていたが、やっぱり回数が重ねてきたことによって顔が見えてくる…いろんな顔が見えてきて、関係性を深まることによって…思いが深まり、祈りが深まるっていうのがあります。(c 氏のインタビューより)

c 氏は継続的な活動によって、被災者の「顔が見えてくる」と考えている。そして、顔が見えてくることによって被災者と救援者の間の関係性が深まり、この深まった関係性によって生じる被災者に対する支援者の「思いが深まり、祈りが深まる」と c 氏は述べていた。

食事を渡すと、(被災者が)涙を流しながら「ありがとうございます」「お兄ちゃん、いつも食事をありがとう」っていわれ感謝をされただけで、私は元気

が出て、そうしたらお役に立てるんだなって思いますね (c 氏のインタビューより)

c 氏はこの感謝されることを強く感じており、「その一言が私たちの活動の原動力となる」と表現した。このように、救援活動中に c 氏の中では活動するたびに感謝され、被災者と繋がりを持つようになり、そのつながりによる感動でまた次の活動へ身を投じるという循環ができた。その循環を繰り返すことで、被災者と救援活動に対する c 氏の思い入れが高まり、それが持続的な活動参加に繋がったのだろう。c 氏以外のメンバーも似たような感想を持っている。f 氏によれば、彼女を次回の活動に参加するよう後押ししたのはいつも別れる際に被災者が発した「また来てね」という一声だった。

救援隊メンバーと被災者の間にある強い信頼関係は、「被災者の心に寄り添いたい」という意志の下で、救援隊が継続的に災害ボランティア活動を展開するうちに自然とできるものだ。しかし、いざこういった関係性ができたら、それは逆に新旧を問わずに救援隊メンバーの継続的な活動参加の後押しとなる。

次に (2) 被災者の相互関係の調節における橋渡し効果だが、前述したように、a 氏らが継続的に活動するよう決めたのは、被災者たちの心に寄り添い、彼ら彼女らの本心を聞き、本当の悩みや隠されていたニーズを見つけ、それに答えるためだった。このような目的を果たすために、やはり長期に渡っての支援活動によって築くことができる支援者と被災者の強い信頼関係が必要である。

小池 (2019) によれば、団地型仮設は、住宅の密度が高く、壁も薄いため、入居者の間の近隣関係が密になりやすい。その一方で、この距離の近さによって入居者はお互いの小さな差異に気づきやすく、それによって発生する近隣トラブルも少なくない。しかし、仮設団地の被災者たちは相談できる相手が限られている。同じ団地に住む他の被災者に相談を持ち掛けても、相手がトラブルに巻き込まれるのを恐れてその関わりを敬遠することが多く、一回や二回の活動だけで終わるような短期的なボランティアに対して、その悩みを打ち明けることもできないのだろう。そのためには、やはり親密な関係にある団地外の第三者が必要になってくるのだ。そして継続的な活動

によって築かれた強い信頼関係にある救援隊のメンバーこそが、第三者としてふさわしい一つの選択肢である。

実際に、西日本豪雨被災地にある市場団地では、救援隊が元の炊き出しに加えてカフェというアレンジを活動内容に組み込んだことで、救援隊メンバーと被災者や被災者の間の交流が進み、良き信頼関係が芽生えたのだ。そのおかげで救援隊メンバーは団地内外における潜在的なニーズを発見し、支援活動の更なる展開を果たした。後から市場団地以外でも下有井地区で炊き出し活動を展開できたのはまさにその成果の一つである。

以上で述べた救援隊と被災者の間で形成される強い信頼関係によって仮設団地で住む被災者たちの交流を促し、団地内の被災者の間の問題の緩和や団地内外の、まだ見ぬニーズに答える事例の中において、救援隊は被災者の間で一種の橋渡し機能を果たしていたのだと筆者は考えており、さらにここでの橋渡し機能は、救援隊と仮設団地被災者の間で、持続的な支援活動により形成された一種のソーシャル・キャピタルの効用ではないのだろうか指摘したい。

続いて、筆者は継続的な活動姿勢によって育てられた被災者と救援隊の強い信頼関係がもたらす最後の効果（3）現場の被災者を活動の協力者として吸収する効果について説明したい。

既述のように、救援隊の活動現場、特に継続的な活動の期間が長い現場では、被災者であるはずの方が救援隊の作業に加わり、支援する側の活動に協力する光景を見られることがある。これらの協力者の中には、e氏のように、救援隊が居住地の被災現場に来る度にメンバーの一員として働くだけでなく、救援隊とともに別の災害の被災地に駆けつけ、そこの被災者のために炊き出しボランティアの手伝いをする者もいる。筆者は、救援隊が被災地現場での活動協力者を得ることができたことに、彼ら彼女らと被災者との間の強い信頼関係が重要な効果を発揮していると考えている。

それと、救援隊がボランティア活動をされていると、周りの方の表情が明るくなるんですね。それを見て私も楽しくて、うれしくて続けて参加させていただいているんですね。（e氏のインタビューより）

実際に、e 氏の継続的な活動参加の理由には、救援隊のメンバーとして仮設団地での炊き出しボランティアに参加することにより、同じ被災者である仮設団地の住民を元気づけることでその明るさに共鳴し、自らも元気づけられる一面が存在する。

また、救援隊と被災者との間に存在する強い信頼関係は、被災地の出身であるかを問わず、救援隊の協力者の活動参加に現場に入りやすい雰囲気をも提供している⁽⁹⁾。

4.2 救援隊メンバー同士の関係性

ボランティア活動への参加とその継続を左右する要因に対する研究では、組織的な活動におけるその組織への帰属意識の高さが安藤・広瀬（1999）によって指摘された。組織への帰属意識に影響を与える要因として、同じ組織の仲間に対する想いの共有が考えられる。

救援隊メンバーの間でも、メンバー同士、そして救援隊そのものに対する愛着が彼ら彼女らの継続的な活動参加に大きな影響を与えていた。

f 氏が救援隊とともに活動していきたいと思った理由に、彼女が最初に救援隊と接触する際に感じたメンバー同士の近い関係性があった。

一緒に活動する方々の間は距離が近いな、本当に身内のように、家族のように（f 氏のインタビューより）

f 氏の話からすれば、救援隊自体が、新メンバーやヘルパーに対する排他性は弱かったと想定できる。そして f 氏は当時彼女が感じたメンバー同士の関係性について「身内」「家族」のような言葉を使っていた。これは、救援隊自体の特性だと筆者は考えている。前節で述べたように、救援隊は、被災者に寄り添うためにいつも話しかけやすく、関わってくる人が入りやすいような雰囲気を作ろうとしている。これは f 氏のような支援活動の新しい参加者にとっては、とても近い関係性が生じているように見えたのだろう。しかし、f 氏にとって救援隊のメンバーが彼女に与えたインパクトは近い関係性だけではなかった。

さらに、f 氏は「救援隊の方々の意識みたいなものとどんどん近くなって

いる」と述べ、自身が活動していくうちに他のメンバーの感情との類似性に気づき、彼ら彼女らに対する共感と敬意が生じたことを指摘した。

前節で救援隊と被災者との、異質の者の間で生じた強い信頼関係を論述する際に、筆者は「橋渡し型ソーシャル・キャピタル」という概念を用いた。従って、この節で検討されてきた救援隊メンバー同士の関係について、筆者はこれが一種の「結束型ソーシャル・キャピタル」として捉えられるものと指摘したい。救援隊メンバーの間には被災者に共感する強い意志と能力という同じ「質」と役割分担を中心とする確固たる協力関係が存在しており、それによってメンバー一人ひとりの救援隊という組織に対する帰属意識が彼ら彼女らの頭の中に強く根ざし、彼ら彼女らに継続的な支援活動参加のための理由を提供している。

4.3 キーパーソンの重要性

金光教大阪災害救援隊では、実際に被災現場で活動する実働部隊でのキーパーソンは間違いなく救援隊参謀のa氏である。筆者が参与観察を行ってきた救援隊の数回の災害ボランティア活動の中で、a氏は活動の中心である炊き出しの主な担当者であり、毎回の活動では事前の人員、資金、食材、調理機材の準備、移動する際の車の運転や実際に食べ物を作る調理場担当など、活動のすべてのプロセスに関与している。

インタビューを受けた他のメンバーたちの⑤救援隊のリーダー格であるa氏に対する想いという質問に対する回答もこれを証明している。

c氏によれば、今救援隊の炊き出しボランティア活動で調理し、最前線に立っておいしい料理を作っているのがa氏だった。しかも、調理の腕や得意なメニューなどの要素を考えると、現在の救援隊ではa氏の代役になれるような人はいなかった。c氏の他にb氏も、a氏について「いなかったら現在の活動の継続は難しい」人だと表現し、d氏は「今はどうしてもa氏が負担している部分が多い」とa氏の中心的な立ち位置を表明しながら懸念していた。e氏の「a氏の姿勢を見ることでもっと何かできるかな」という表現からはa氏が被災者のために一生懸命頑張っている姿には、救援隊の他のメンバーにもっと行動するよう促す力が潜んでいることが伺える。

これらの発言から見られるように、救援隊メンバー全員はa氏のことを高く評価しており、救援隊活動の中心的な人物だと考えていることが分か

った。さらに、一部の隊員は a 氏の存在を自身の継続的な活動参加における重要な要因だと捉え、a 氏を支えたいために継続的に活動に参加している一面が見受けられた。

5. 存続問題と向き合う救援隊

継続的な災害ボランティア活動を行うために、救援隊が組織として維持していただくことが必要である。そして、救援隊が組織として存続できる最も特徴的な理由として、救援隊と教団本部との特殊な関係性が挙げられる。筆者はこれを「やや遠い関係性」だと主張したい。

5.1 教団本部とのやや遠い関係性

まず、この「やや遠い関係性」はどのようなものか、それが救援隊の継続的な災害ボランティア活動にどのような影響を及ぼしているのかについて論じてみたい。

救援隊は、組織上では、教団本部ではなく、金光教の大阪センターが直轄する「各種団体」となっている。そのために、救援隊の活動は、基本的に教団本部による命令ではなく、あくまでもある程度独立した、独自性のある活動となっており、それが上述した「やや遠い関係性」を代表する最も大きいな特徴だと筆者は考えている。

a 氏によれば、救援隊の活動展開にあたって、ほとんどの意思決定は隊内部で完結しており、本部はおろか、直属している大阪センターによる干渉を受けることも少なかった。この独立的な姿勢は、救援隊内部の人員構成にも関係している。大阪センター直轄の「各種団体」である救援隊だが、その主な担当者のほとんどは大阪センターの者ではなく、各教会を担当する教師が要請する、または志願によって入隊した者ばかりだ。特に長年隊長を担当してきた s 氏は、金光教大阪教会の教師であり、金光教内においても相当な立ち位置に立つ者なのだ。当然、こういった独立的な活動傾向は、活動展開時だけではなく、救援隊の活動中にも表れている。救援隊の熊本益城町安永仮設団地における災害ボランティア活動の中では、金光教熊本教会の教師 m 氏を始め、熊本教会の信徒の何人かが活動に参加したり場所提供したり

して救援隊をサポートしてくれていたが、これらのやり取りも教団本部による仲介ではなく、あくまでも現地における本人たちが直接に連絡を取った結果だった。

a氏によれば、金光教教団本部は救援隊に対して彼らの災害ボランティア活動における独立な姿勢を尊重し、対応していた。命令も指示も出さなければ、勝手に手助けしようとししない。そのおかげで、救援隊のメンバーは被災地においてある程度の自由を与えられ、自分の意志によって支援の手薄い場所に行きつけ、自分の意志で長年継続的な支援活動を展開することが可能となった。

また、独立性のある活動ができるため、救援隊は教内外の他組織との連携も円滑に展開することも可能となった。教内においては、救援隊は少年少女連合本部、首都圏フォーラム、みちのくボランティア隊など、教団本部や他各地域に所属する災害救援に関する組織と連携を取り、救援隊のみでは力不足の泥だしなどの支援活動を頼む代わりに、向こうでは容易にできない深入りした、長期的な支援を担い、互いに手が届かない所をカバーしあってきた。そして教外では、救援隊は特にf氏が所属する大学の先生との連携を取っており、活動現場を実践の場として学生たちに提供する代わりに学生のメンバーで人員補充の問題をある程度解消してきたのだ。

しかし、一定的な距離を保てているとはいえ、金光教教団本部は救援隊の活動に対して一切の支援を提供していないわけではない。a氏によれば、救援隊はこれまでの災害ボランティア活動の中で確かに教団本部による財的支援を受けていた。

以上で述べたように、教団本部と救援隊の間にある「やや遠い関係性」のメリットとして救援隊はメンバー自らの意志に準じた比較的に独立した活動姿勢を維持できることが挙げられる。しかし、こういった「やや遠い関係性」は同時に、救援隊自身の存続問題を考える際に一つ大きなデメリットにもなっている。

現在の救援隊の存続問題を考える際に、最も懸念されているのはやはり人員補充の問題だと考えられる。実際に、筆者が参与観察を行ってきた期間中に、毎回救援隊の活動に参加していた人数は特に少ないわけではないが、長い期間にわたり参加し続けているメンバーの数は限られていた。現在の救援隊では、主要メンバーとして複数回の災害ボランティア活動に参加し

ているのは本文のインタビュー対象の6名以外にプラス1名の7名である。特に金光教の信徒を見ると、救援隊の活動に定着して継続的に関わってくるようになる新たなメンバーは増えずにいる。この中には救援隊と金光教本部との間にある「やや遠い関係性」による影響も存在すると考えられる。これによって金光教内における救援隊に対する認知度、そして救援隊が展開してきた継続的な災害ボランティアの重要性に対する理解度が不足しているからだ。

その理由の一つとして、救援隊が活動を展開してきた主な二つの場所はそれぞれ東北地方と熊本県であり、両方とも最も信徒が集まりやすい金光教の教団本部が位置する岡山とかなりの距離で離れている場所だった。この物理上の遠い距離によって救援隊がなされてきたことが金光教の信徒になかなか伝わらずにいたことは容易に想像できる。

教団本部が救援隊の災害救援活動に口出ししない代わりに、積極的に関与することもしないままだった。たとえ教内の新聞記者を現場派遣していたとしても、救援隊の継続的な支援活動によって得られた成果は実際に現場で救援隊メンバーと被災者の間にある雰囲気を経験し、彼ら彼女らの交流によってスムーズな傾聴ボランティアが行われたことを目の前で確認しないと、新聞に載せられている文字だけではなかなか伝わらないものである。だからこそ、今まで救援隊と一定的な距離を保ち続けてきた教団本部にとって、これらを伝えることも、宣伝することも難しく、それによって教内における救援隊の認知度も低いままだったのだろう。

しかし、近年になって、上述した状況は一つ大きなターニングポイントを迎えてきた。2018年の西日本豪雨後、現場に駆け付けた救援隊は岡山県倉敷市真備町市場仮設団地を主な支援対象として決めたからである。この被災地は金光教の教団本庁の所在地である金光町に近い場所であり、救援隊の災害ボランティア活動は本部から容易に確認できる。実際に真備町での活動では、一日限定という状況が多かったとはいえ、教団本部からの活動参加者が多数現れた。

こうして一見転機を迎えてきた教団本部と救援隊の間にある「やや遠い関係性」だが、救援隊の存続問題の解決するに至るまでにはいまだ大きな差があるのも事実だ。

5.2 組織化、持続化の難しさ

救援隊内部でも、隊組織そのものの持続化にマイナスな影響を及ぼしている要素が存在する。救援隊の組織化、持続化を考える際に、最初に上がってくる問題は、救援隊現在の a 氏を中心とする活動姿勢である。

前章で触れたように、現在の救援隊の活動は炊き出しボランティアを中心に展開されている。そして、この炊き出し活動において、a 氏はほとんどすべての手順で重役を担っており、他の隊員に比べて極めて多くの負担を抱えている。メンバーの中でも a 氏を心配する意見がよくあった。筆者のインタビュー中でも、「④これからの救援隊の活動展開において気になっていること」という質問に対して、多くの対象者が a 氏の健康状況と a 氏がいな場合の活動展開に関する心配を話していた。

今は被災地の方に行けているけど、これからたくさん増えたときに、今まで活動の中心となる a 氏の体がオーバーワークで壊れないかが心配です（c 氏のインタビューより）

今はどうしても a 氏が負担している部分が多いがあるので、そういったところこそ役割を分担できるような人材を育ててほしいなと思います。（d 氏のインタビューより）

今のような a 氏を中心とする活動姿勢では、救援隊の炊き出しで提供されるお弁当の高い質を保証でき、自然的に被災者の心を呼び寄せるメリットがある一方、万が一 a 氏が活動に参加できない場合、活動自体が停滞するという大きなリスクを潜んでおり、その場合、救援隊の組織も大きな危機にさらされることとなる。

次に、救援隊の組織化、持続化のために、継続的に活動に参加できる一定的な人数を維持することは必要である。しかし、先述した通り、救援隊では現状、隊に定着して活動を継続的に参加できるメンバーをなかなか増やせないでいる。この原因は現在の救援隊のメンバーに対する統率方法にあると考えられる。

確かに、救援隊は独自の継続的な活動様式によって、被災者との間に強い関係性を築くことができ、その関係性によって新たな活動参加者に入りや

すい環境を作っており、救援隊メンバー自身も、宗教の信仰の有無を問わず活動参加者に対して友好的な態度を保っている。一方で、救援隊の中では、メンバーは主に被災者に対する強い共感力や被災者を助けたい意識で活動をしている。しかしこういった共感能力の多くは個人それぞれが持つ利他的な性格によるものであり、容易に他の活動参加者にシェアできるようなものではなかった。そのためか、救援隊活動におけるメンバーに対する統率は主にそのメンバーの自律や個人の共感性に頼っている。この統率方法の中では、新メンバーは共感性や人を助けたい意識が現在の救援隊メンバーほどではないとなかなか救援隊の中で長く活動が続けられないと筆者は認識している。しかし、これと同時に、この統率方法によって選別される新たな隊員は、継続的な活動参加の動機が保証される。

6. おわりに

本研究では、新宗教の信仰者による災害ボランティア活動の持続要因を、宗教の社会貢献と宗教組織による災害支援活動に関する先行研究を踏まえて、金光教大阪災害救援隊を対象に、メンバーという個人の視点と救援隊という組織の視点から検討を行った。

その結果、個人面において、救援隊の継続的な活動姿勢で蓄積されるメンバー同士とメンバーと被災者との信頼関係によって、個々のメンバーは高い共感力や信仰などを始めとする元々本人の「質」にあった部分に加え、活動回数を重ねていくうちに被災者との繋がりをはじめとするより多くの活動動機を獲得し、救援活動へ継続的に参加することが可能になったと指摘できる。また、組織面では、救援隊が同じ被災地での長い間の災害ボランティア活動を維持してきた最も特徴的な理由は教団本部との「やや遠い関係」である。すなわち教団本部が救援隊に対して、財政的な補助を行うも、指示や宣伝など、活動への干渉をほとんど行わない関係性だ。このような関係性は、救援隊の活動独立性を与え、継続的なボランティア行為を許したのと同時に、救援隊が現在直面している人員補充の難題にも直結していると結論づけられる。

近年では、災害救援活動における「心のケア」の重要性が認識されるよう

になり、その中で稲場（2013:30）は「心だけを切り取ったケアは成り立たない」と主張し、炊き出し、御用聞きなど可能な限りを尽くす「丸ごとのケア」の必要性を示した。筆者は、「丸ごとのケア」を実現するには持続的な支援活動が必要で、そこでボランティア側が活動を継続する要因を探求する本研究が参考になると考えている。確かに、本研究の結論は、あくまでも一団体に限定された研究により得たものであり、新宗教全般ないし一般の災害ボランティア活動の研究で応用するには根拠が不十分に思われるだろう。しかし、本研究の結論で指摘した個々の参加者の高い共感能力、被災者との信頼関係づくりや一定の独立性を与えられた組織といった要因はいずれも新宗教に限らずボランティア団体全般で適用可能なものであり、今後の災害ボランティア活動を展開際に参考する価値を備わっていると筆者は考えている。

注

- (1) 1995年の阪神淡路大震災を機にボランティア活動が活発化する傾向がある日本では、企業や福祉団体によるボランティア活動が注目の対象としてよくメディア、研究者に取り上げられる一方で、同じく社会的責任を果たしている宗教団体に対する注目は個別の研究にとどまりやすく、宗教団体の社会貢献活動そのものを議論する声が少なかった。こうした環境の中で2006年に「宗教の社会貢献活動研究」プロジェクトが立ち上げられ、その成果の一つとして2009年に刊行された稲場・櫻井編『社会貢献する宗教』があげられる。
- (2) アメリカでは、19世紀のTocquevilleの『De la démocratie en Amérique』（訳『アメリカの民主政治』）をきっかけに、社会活動を宗教と結びついて論じるようになった。特に、20世紀末期、Christopher S.とSallie B.の『Engaged Buddhism: Buddhist Liberation Movements in Asia, State University of New York Press』では、仏教の社会参画と貢献を直接に取り上げるようになった。
- (3) このモデルではClaryら（1998）はボランティア活動の参加動機をボランティア活動の機能から分析し、①価値機能（己の価値観を行動で示す）、認識機能（非常用技能の学習と練習）、キャリア機能（今後のキャリアに関わる技能と知識の習得）、社会機能（参加者の社会関係の強化）、強化機能（精神面における参加者の自己鍛錬など）、保護機能（負罪感など個人のネガティブな感覚や問題からの離脱）の六つの動機を指摘した。
- (4) 高木・玉木（1996）は阪神淡路大震災後のボランティア活動参加の動機を検討する際に、①共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容、②他者による援助要請、③利得・損失計算、④良い気分の維持と発展、⑤好ましい援助・被援助経験、⑥被災地との近接性、⑦被災者や被災地への好意的な態度といった七つの動機を挙げた。

- (5) 金光教内において、「人あつての神、神あつての人、あいよかけよで立ち行く」は教祖、すなわち生神金光大神が神と人との関係性を表現する際に説いた言葉で、同教においては最も核心的な教義である。
- (6) ここで説明しておきたいのは、金光教全体が災害ボランティアに関与する時期はほかの諸宗教と比べて決して遅いほうではなく、少なくとも 1951 年に各教会とそれらが属する市町村を自然災害や火災などによる被害から援助するために「災害救済金」制度を確立した時点で明確的に災害ボランティア活動への関与を示し始めていた。しかし、先述のように、本研究における主な対象である金光教大阪災害救援隊は 2011 より発足した組織であり、この時点で金光教では未だに先行研究で紹介されたような教団本部と深く結び付き、それぞれの教会をつなぎとめ、連携させながら展開される災害ボランティア組織が見られなかった。
- (7) 金光教の本部は岡山県浅口市にあるが、教内では日本国内を 13 の「教区」に分けて事務取り運びなどを行ってきた。その中で、これらの教区を各自で担当し、教区内の諸教会をサポートするために教務センターが設置された。そして、救援隊は金光教の中近畿教区（大阪・奈良・和歌山）にある各教会をサポートする大阪センターに直属する「各種団体」として教内で登録し、大阪センターの会議で活動の場所、方針などを決めてきた。
- (8) a 氏に対するインタビューだけ時間も回数も他のインタビューより長い理由は彼が救援隊の管理層で、2011 年の救援隊の発足に大きく関与しており、2011 年から 2019 年現時点までの救援隊の変化と成長を一番よくわかっている者だからだ。
- (9) 筆者の考えでは、長期的な支援活動によって、救援隊のメンバーと被災者との間では親戚や友達のような関係性ができており、その活動現場ではいつも被災者が手伝いに来ていた。その光景は元々関連の薄いよその人を気さくに手伝いに来させるのに十分である。実際に、安永仮設団地での救援隊のボランティア活動では、e 氏以外にも仮設団地以外に住んでいる団地住民の知り合いの方が協力者として時々かよって来ていた。

参考文献

- 稲場 圭信・桜井 義秀編 2009『社会貢献する宗教』世界思想社。
- 稲場 圭信 2011『利他主義と宗教』弘文堂。
- 稲場 圭信・黒崎 浩行編 2013『宗教とソーシャル・キャピタル 震災復興と宗教』明石書店。
- 大菅 俊幸 2006『泥の菩薩—NGO に生きた仏教者、有馬実成』大法輪閣。
- 大西 克明 2008「組織アイデンティティと宗教集団論——宗教集団の多元性へのパースペクティブを巡って」『東洋哲学研究所紀要』24: 294-314。
- 小池 高史 2019「震災後の仮設住宅における近隣関係—熊本地震被災地の団地型仮設とみなし仮設の比較—」『地域共創学会誌』2: 1-12。
- 小澤 浩 2010『生き神の思想史 日本の近代化と民衆宗教』岩波書店。

- 小澤 浩 2016『人が助かることさえできれば——「戦争」と「テロ」の時代を見据えて』白馬社。
- 高木 修・玉木 和歌子 1996「阪神・淡路大震災におけるボランティア——災害ボランティアの活動とその経験の影響」『関西大学社会学部紀要』28(1): 1-62。
- 高橋 典史 2014「宗教組織によるインドネシア難民支援事業の展開：立正佼成会を事例に」『宗教と社会貢献』4(1): 1-25。
- 竹部 弘 2016『神人の祈り』金光教徒社。
- 田尾 雅夫 2001「ボランティアとNPO・NGO —組織論の立場からの論点整理—」『国際協力研究』17(1): 1-6。
- 大門 大朗・渥美 公秀・稲場 圭信・王 文潔 2020「災害ボランティアの組織化のための戦略」『実験社会心理学研究』60(1): 18-36。
- 寺田 喜朗・塚田 穂高・川又 俊則・小島 伸之 2016『近現代日本の宗教変動—実証的宗教社会学の視座から』ハーベスト社。
- 寺田 喜朗 2019「新宗教教団の支援活動②—創価学会・福島常磐総県の実例から—」星野 英紀・弓山 達也編『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』ハーベスト社、167-196。
- 寺澤 重法 2012「宗教参加と社会活動」『現代社会学研究』25: 55-72。
- 藤井 麻央 2019「新宗教教団の支援活動①—天理教・いわき市の事例から—」『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』ハーベスト社。
- 渡辺 一城 2011「宗教による社会的活動の意義と天理教におけるひのきしん活動の在り方」『天理教大学人権問題研究室紀要』14: 23-35。
- 安藤 香織・広瀬 幸雄 1999「環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的活動意図の規定因」『社会心理学研究』15 (2): 90-99。
- ソローキン P.A. 1977『利他愛—善き隣人と聖者の研究』下程 勇吉訳、広学学園事業部。
- ソローキン P.A. 1998『災害における人と社会』大矢 根淳訳、文化書房博文社。
- ベラーR.N. 1996『徳川時代の宗教』岩波書店。
- パットナム R.D. 2006『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柴内康文訳、柏書房。
- Clary, E.G., Snyder, M., Ridge, R.D., Copeland, J., Stukas, A.A., Haugen, J. and Miene, P. 1998. Understanding and Assessing the Motivations of Volunteers: A Functional Approach. *Journal of Personality and Social Psychology*. 74(6):1516-1530.
- Gerard, David. 1985. What Makes a Volunteer?. *New Society* 8:236-238.
- Wilson, John., Janoski, Thomas. 1995. The Contribution of Religion to Volunteer Work. *Sociology of Religion* 56(2):137-152.
- Louis, Penner A., Finkelstein, Marcia A. 1998. Dispositional and Structural Determinants of

Volunteerism. *Journal of Personality and Social Psychology* 74(2):525-537.